國學院大學学術情報リポジトリ

大成教禊教『禊教会雑誌』解題・目次補遺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 悠之介, 萩原, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001551

大成教禊教『禊教会雑誌』解題・目次補遺

木村　悠之介・荻原　稔

はじめに

本稿は、本誌前号に寄稿した木村悠之介・荻原稔「大成教禊教『禊教新誌』『禊教会雑誌』『みそゝき』解題・目次」（以下「前回」）の補遺である[1]。『禊教会雑誌』について、前号の時点では第１、２、５号の目次を作成し、第３、４、６～11号は未発見と記したが、その後の調査によって第７、８、10、11号の４冊を確認できたため、今回、追加の目次を作成するとともに、新たに判明した事実や直近の研究動向について補足を行う。解題に際しては、第１節「大成教禊教の状況」を荻原が、第２節「同時代的な位置づけ」を木村が最初に執筆したうえで、相互の討議により各部分の記述を補った。

今回確認した『禊教会雑誌』は、群馬県の伊勢崎市教育委員会が管理する田島弥平旧宅（国指定史跡・世界遺産）の所蔵資料に含まれているものだ[2]。誌上では、文苑欄に「上毛 田島霞山」こと田島定邦（弥平の弟）が漢詩を寄せており（第７号）、その関係で蔵書に加わったのだろう。他には、教義に関する問答の回答者・出題者として「田島丈吉」の名が見えるものの（同）、弥平らとの関係は不明である。

そもそも田島弥平（1822～1898）は、伊勢崎市境島村地区の有力な蚕種製造農家として養蚕の近代化に尽力した人物で、同地にほど近い埼玉県深谷市血洗島出身の渋沢栄一とも交流があった。この地区の島村蚕種については、弘化２（1845）年、井上正鐵が三宅島に移入した白繭種との関連を推測できる[3]（在島時の正鐵に関しては本誌トピック７も参照）。逆に、田島弥平旧宅の主屋前に何本か植栽されている蘇鉄は、正鐵門中においては“正鐵が蘇る”意で尊重される植物だった[4]。弥平の著書『養蚕新論』の挿絵からは弥平の時代に植えはじめたものにも思われるが[5]、大成教禊教との関係で持ち込まれた可能性を考えうる。

『禊教会雑誌』や『みそゝき』にたびたび登場する伊勢崎の信徒としては矢島庄五郎（前回第３節第２項参照）がおり、1890（明治23）年には伊勢崎で齋藤鷲郎・須川安太郎・村田岩太郎らとともに「禊教青年講究会」を設立し、演説と幻灯上映を行っていた（第11号）。同時期の深谷駅では、簗瀬弥三郎ら熱心な信徒による「親友会」が神道大演説を催し、本荘宗武と加藤直鐵を招いたと報じられている（第10号。加藤は病欠）。伊勢崎・深谷近辺における大成教禊教の盛り上がりを感じることができよう。

１．大成教禊教の状況

（１）井上正鐵生誕100年と平山省斎葬儀

今回確認できた『禊教会雑誌』第７、８、10、11号から分かる大成教禊教の状況を、1890（明治23）年を中心に押さえておきたい。

1890年は、井上正鐵生誕100年であって、40年祭である前年と共に、大成教禊教活動の総体としては絶頂期であったといえる。６月の雑報「横尾本院の近況」（第７号）には、横尾

本院から『井上正鐵翁遺訓集』（巻之三、四以降）が印刷刊行される予告がある。1887年に刊行された巻之一と巻之二にはすでに写本で流布していたような周知の文書が収録されていたのに対し、1890年から順次刊行された巻之三以降には、各地の直門に伝存した遺文を横尾信守が筆写収集し、多くの門中（信徒）にとっては初見となった文書が収録されている。また同じ雑報には『井上正鐵翁在嶋記』の記事もあり、生誕100年を迎えるなかで出版活動への期待感が醸成されていたのである。

しかし、そうした高揚感のある時期ではあったが、大成教の創設者であり、1877年３月に「禊教総管」となって以来、中心的な指導者であった平山省斎が、５月22日に76歳で死去した。第７号の冒頭には、「会説」に代えて、井上正鐵の直門本荘宗秀の子であり、最後の宮津藩主であった本荘宗武が葬儀の際に読み上げた「弔文」が掲げられており、「故平山省斎翁葬儀録」として、葬儀次第と共に「葬場詞」ほかの文章が掲載されている。記事によれば、平山は前年春に大病をしてから不調が続き、「起居動作さへはかばかしからざりし」状態だったが、流行感冒に罹って22日午後12時に死去した。葬儀は26日午後３時に小石川原町の自邸を出棺して、４時30分に谷中の全生庵[6]に到着し、神式で葬祭を執行した。

斎主は２代目管長となる磯部最信で、副斎主東宮千別以下の祭員は、祓主村越鐵善、典礼福田長之、大麻麻生正守と、みな禊教の教師であり、大成教における禊教の位置が窺える。葬祭終了後、午後６時に「谷中共葬地」（谷中墓地）へ埋葬された[7]。

また、10月には平山の百日祭における池上雪枝の「祈願文」が掲載されている[8]（第11号）。そこには「雪枝子はわが浪速津にて特更にみうつくしみをかゝふり御教をかゝふ奉りし身なれば」とあり、平山から特段の待遇を受けていたことが分かる。池上が大阪の真理教会で行い感化院の嚆矢とされる社会事業も、一所属教会の単独事業ではなく、平山の意図も汲んだ大成教としての実践であったと読み取ることができるだろう（前回第２節第２項も参照）。

（2）教会名の番号化による組織改良

大成教禊教は、傘下の教会の団結を懸案としており、1883（明治16）年９月に禊教同盟団結釐正委員を置いて[9]、傘下の各教会の団結を図ろうとしてきたが、なかでも創設の経緯によって種々になっていた教会名称の統一は大きな課題だった。1889年５月には立教地梅田村に「禊教総本院」を設置したうえで、各教会を「東宮本院」のように創立者の姓を冠した名称へ揃えていた。

この問題について1890年10月に杉村敬道[10]が寄稿した「禊教団結上の改良を望む」（第11号）は、「其名称に於て何々本院何々分院と各自の姓名を挿入し傲然として得意の風ある余の尤も嫌忌するのみならず識者の冷笑を受け又は他教へ対し大に恥るあらむとす」とし、「団結の実を挙行し協同一致の美を天下に頌揚せんとならば総本院の外甲乙丙丁分教会とか或は何号分院とか（地方は地名を称すべし）に改称し先師の教えに随ひ団結の体面を再洗して八天下の如き嫌ひを捨て公明正大の誠心に改良して禊の一字の本分を全ふせんとは禊教の一大急務に依る物也」と述べている。

実際、1892年３月には、「禊教総本院」を「禊大教院」としたうえで、各教会を番号化して「第一教院」のように称する改革が行われた[11]。こうした教会名番号化の出発点は1890年の杉村記事にあると思われる。さらに編者の加藤直鐵は、同記事に対するコメントにおいて、教団の組織改良を「神道社会の波瀾、国会開設、対等条約等いづれも教法家の注目すべき要

点」と並べていた。関係者の意識としては単なる教団内の事項ではなかったのである。

（3）新出の正鐵書簡

また、今回の４冊の確認により、今まで知られていない井上正鐵の書簡が見つかった。1890（明治23）年６月の高橋吉伴「教祖逸事の一」（第７号）には、天保14（1843）年２月８日に牢内から発信された書簡の全文が引用されている。紹介者の高橋吉伴は、埼玉県幡羅郡長井村西野（現在の熊谷市西野）の人で、直門・高橋亀次郎の孫とみられる[12]。書簡については「今尚余の家に蔵せり」と記されており、当時は高橋家の所蔵であった。

一　八日御書面早速相届き拝見仕る
一　今九つ時梅田御呼出しの趣委細承知仕候私も明日御呼出し落着と奉存候先づ遠嶋被仰付候事と奉存候明日白川御役所へ御呼出しに相成候や此段承り度奉存候
一　明日私呼出しに御座候はゞ御目に懸り度奉存候間其思召にて御都合可被下候御返事まで早々以上
　　二月八日　　正より

この書簡が出された２月８日は、天保14年であり、寺社奉行からの申渡の前日であったが、文面からは、すでに遠島に処せられることを承知していたようであり、保釈や減刑に向けての関与があった白川家に関する話題もあって、そうした活動の中心を担った加藤鐵秀宛の書簡と思われる。加藤は、後年西野村に住んだことがあったので、高橋家にこの書簡が残されたものであろう。正鐵自身が開いた地方拠点の門人が、まだ大成教禊教に関係していたのだった。なお、西野と田島弥平家のある島村とはわずか６キロほどの距離である。

（4）前回の補遺

今回の４冊に関わる部分ではないが、前回触れられなかった点を二つ補っておきたい。

一つ目は、1893（明治26）年２月の『みそゝき』に掲載された、「信州伊那の一教老師」坂牧惣助の紹介記事についてである。この記事には、「老姓は坂牧名は総助春秋七十有三、教祖直門の故伊東要〔伊藤要人〕先生の親炙を受け今茲に禊教に従事すること数十年一日の如し」で、「唱祓の仕口をは徹頭徹尾八声にして強盛なる趣き」と記されている（第39号）。大成教禊教の修行では、三種祓詞（「トホカミエミタメ」）の八音を「おさ」（リーダー）が振る鈴のリズムに合わせて大声で唱えていくのだが、「八声」とは、鈴一振りに一音ずつが対応するという意味である。今日でも「八声」「四声」「二声」と変化する「四つ祓」の教会と、「八声」「五声」「二声」と変化する「五つ祓」の教会が残っているが、こうした相違は、正鐵遠島後の早い時期から発生したらしい[13]。しかし、伊那の門中は、正鐵が1840（天保11）年に開教した翌年には、独立した活動を開始しているので、この「徹頭徹尾八声」の唱え方が正鐵時代の古型である可能性が高い。また、1934（昭和９）年11月に、伊藤門下の最後の教師山上勘吉の指導による初学修行を成就した田中清隆氏が「お祓いの上げ方は、と・ほ・か・み・え・み・た・めと同じに続けるだけ」（1988年４月談）と語っていたのと符合する。

二つ目は、禊大教院第四教院（旧・麻生本院）の麻生正守と養子の正一についてである。1893年７月の『みそゝき』記事「禊教信徒の破門」に、正守が正一を「離別の上更に教義破

門」したとあり（第44号）、そのわずか２か月後の９月には「禊大教院第四教院々長麻生正守氏逝く」という訃報が出ている（第46号。「五月初旬より病に罹り」という）。正一は、前年の1892年６月に禊教大教院第十七教院院長となっており（第31号）、大成教禊教の幹部教師だった。破門当時26歳だったが、この1893年に神道本局で少教正となっているので[14]、大成教から神道本局への幹部教師の転属にかかわるトラブルであったと思われる。これについて正一の養嗣子であった麻生昌孝氏が「父は平山先生の門下ですので大成教の教師でしたが、平山先生が亡くなってから大成教を離れました。平山先生にかわいがられていたので、他の人たちからのやっかみもあったと思います。」（1986年８月談）と語っていたのと符合する。

２．同時代的な位置づけ

（１）雑誌発行をめぐる事情と府県社以下神官教導職分離非分離問題

前回第１節第１項では『禊教会雑誌』や『みそゝき』の発行事情を概観したが、今回の欠号補充によって新たに判明したことがいくつかある。

まず、前回注８において『井上正鐵翁在島記』売捌所リストから“発行所に変化があったと思われる”と述べた「禊教会雑誌社」について、事情が分かった。雑誌奥付に見える発行所の名義は、『みそゝき』への改題直前の第11号に至るまで、小石川区原町の「大成教禊教総本院事務所」から動いていない。猿楽町17番地は発行人・加藤直鐵の住所であり、誌上の『井上正鐵翁在島記』広告ではやはり売捌所として猿楽町の「禊教会雑誌発行所」が出てくる（第７号）。名義上の発行所は総本院ながら、実務は加藤が担っていたために、書籍取次に際して住所が使い分けられたというあたりだろう。

次に、1890（明治23）年11月の『みそゝき』改題について、前回第３節第２項では加藤直鐵「改題の理由」が意識していた当時の帝国大学総長・加藤弘之による「トホカミ」揶揄事件と、磯部武者五郎の反論に表れている組織「改革」論（『みそゝき』第12号）を取り上げた。『禊教会雑誌』を見るに、改題自体はあくまでも事件より前から多数の教会を「大成」し「気脈を開通」すべく計画されており（第11号）、加藤弘之を意識した部分は後づけと言えるが、誌上の議論からは、加藤弘之の事件を招いた前提としての、府県社以下神官教導職分離非分離問題への対応が見えてくる。

すなわち、当時の神道界においては、1882年の神官教導職分離において例外とされた府県社以下の神職について、分離の徹底を行うべきかどうかが取り沙汰されていた[15]。加藤直鐵は分離も非分離も「末の末端の端などの区々たる小説」に過ぎず、「神道社会は飽までも合同一致して社会の信用を買はんとする」のがよいと述べ、雑誌『随在天神（カムナガラ）』の分離論に対抗している（第10号）。もちろん、それは単なる中立というよりは非分離論を擁護する効果を持つ。『随在天神』と『禊教会雑誌』の論争はそれ以前に加藤が分離非分離の「仲裁論」を説いたことが発端だったようで[16]、おそらくは欠号分の第９号に掲載していたのだろう。

加藤が『みそゝき』への改題を告知したのはその直後にあたる1890年10月で、このときの論説欄には須々木生「神祇官ノ事」、磯部武者五郎「神社ハ信仰心ニ依テ維持ス」が出ている（第11号）。「神祇官ノ事」は、天皇親祭の下での「神官」による奉仕や「教導職」による布教を必要なものとする一方、宮中と別に神祇官を置くことは「祭政一致」の理念にそぐわない行為だとして否定的に捉えている。この須々木生はおそらく、まだ帝大勤めだった鈴木真年ではないだろうか（前回第１節第２項も参照）。「神社ハ信仰心ニ依テ維持ス」はタイト

ルどおり神社における「宗教」の側面を重視した記事だが、磯部はそれまでの連載「真理上ヨリ我神道教ヲ論ス」を休んでわざわざ寄稿しており、時期的には前回注53で言及した山崎泰輔への反論として位置づけうる（これも分離非分離問題に起因する論争だった）。禊教会に限らない大成教全体の団結や教会組織の整備は、以上のような論争状況のなかで求められたものに他ならなかった[17]。

『随在天神』が『禊教会雑誌』以外に反論対象としたのは『郵便報知新聞』に掲載された中島徳明という人物の議論のみであり[18]、非分離論者側における意見発表の媒体としての『禊教会雑誌』の中心性を窺える。前回触れたように、当時の教派神道諸派による雑誌として、他にはまだ長野県の神宮青年教会による『光華叢誌』が出ていた程度で、神道本局による『神道』の創刊は1890年12月であるから、納得のいく結果と言えよう（『大社教雑誌』も刊行を継続していたが、内容などは不明）[19]。

（2）菟道春千代に関する補足

教派間の連携に関連して、1892（明治25）年に『みそゝき』編集の補助員候補へ名前が挙がっていた菟道春千代（前回第１節参照）に関する補足を行いたい。1890年６月の『禊教会雑誌』には、菟道による『新撰軍歌集第壱編 正行卿（四条畷の段）』および『贈従三位楠正行朝臣墳墓之図』の広告が出ている（第７号）。現在確認できる最も早い菟道の寄稿は同じ号における平山省斎への追悼文であり、この頃にはすでに本荘宗武の邸宅へ寄寓していたこと、神道各派が持ち回りで行っていた賢所遥拝式にも出席していたことが分かる（同）。

その菟道について、前回は唱歌集や食養に関する先行研究を挙げたのみだったが、実は現在、複数の方面から着目されてきているようだ。2022年３月の『近代出版研究』では、古本マニアのブロガー「神保町のオタ」が菟道や本荘宗武ら雅学協会による1890年９月の『雅人』創刊に触れ、『雅人』や依田学海の日記から、菟道に関する伝記的事項を明らかにしている[20]。同年４～11月には教育学の新谷恭明が、主に唱歌作者としての側面について菟道に関するブログ記事を複数書いている[21]。

本稿の趣旨から特に着目すべきは、2023年２月18日の民族文化研究会で行われた竹見靖秋による報告「神習教直轄宮比教会における芸能」である。同報告は、俳諧系に代表される芸能関係者による神道教会の新たな事例として、菟道と宮崎玉緒による雅学協会や神習教直轄宮比教会（1892年３月開設）の活動を『雅人』などの記事や公文書によって詳細に跡づけている[22]。前回紹介した大成教禊教での立ち位置には触れられていないものの、『みそゝき』編集補助員への就任が取り沙汰されたのは宮比教会開設の直前で、開設後の時期も複数の記事を寄せているため、重複していたと考えてよい（宮崎も『みそゝき』文苑欄で選者を務めていた）。菟道の寄稿は８月の第33号に社説欄をはじめ多くの記事を書いたのが最後だが、同報告によれば宮比教会のほうも1892年４月の八橋検校二百年祭以外に目立った活動は見受けられず、翌1893年には菟道の健康問題が生じていたと指摘されているため、大成教禊教から神習教に活動の中心を移したというよりは、両方を並行したあと、健康問題によっていずれもフェードアウトしたと考えるほうがよさそうだ。

なお、神習教直轄宮比教会について同報告は“少なくとも昭和に入る頃までには消滅していたようである”とも指摘しているが、実は菟道は1930（昭和５）年にも、「調髪美容」を主眼とする「神道宮比会」を創立していた[23]。これが特定の教派に属するものだったかどう

かは分からない。

2023年２月21日には、本稿共著者の荻原が、本誌トピック７の報告「井上正鐵の三宅島における活動とその影響」を行い、正鐵と梅辻規清の交流を取り上げたうえで、大成教禊教と神習教の関係に論及した。『教祖井上正鐵大人實伝記』と『教祖梅辻規清大人實記』の著者・岸本昌熾が中心となった神習教二葉教会[24]の名簿（岸本昌良氏所蔵）には、菟道およびその妻・きみが加入者として名を連ねていたのである。前回第３節第１項では、神習教管長・芳村正秉による著述の宣伝依頼やシカゴ万国宗教会議における磯部と芳村の指名に言及したが、大成教禊教と神習教における人脈の重なりも、今後検討すべき課題だろう。

『禊教会雑誌』目次補遺

『禊教会雑誌』は伊勢崎市教育委員会が第７、８、10、11号、明治文庫が第１、２、５号を所蔵している。伊勢崎市教育委員会所蔵分に関しては、横浜開港資料館による紙焼も作成されている。『禊教会雑誌』第１、２、５号と、継続前誌・後誌の『禊教新誌』『みそゝき』に関しては前回を参照されたい。

欠号分（『禊教新誌』第６号以降、『禊教会雑誌』第３、４、６、９号、『みそゝき』第23号）については引きつづき捜索していきたい。情報提供もお待ちしている。

【採録対象および表記】前回に準じた。

【正誤】前号掲載分51頁、第41号論説欄の「磯場武者五郎」は「磯部武者五郎」が正しい。

第７号　1890年６月25日発行　32頁

会説〔平山省斎葬儀における弔文〕（本荘宗武）

論説　国体組織上より我神道を論ず 第三 国体と神道教（磯部武者五郎）

随感随筆〔大日本農会の農談会における土方宮内大臣の演説／米価高騰〕／教祖逸事の一／同〔天保十四年二月八日に牢内より発信の井上正鐵書簡の引用あり〕（高橋吉伴）

故平山省斎翁葬儀録 附悼詞、和歌、発句〔５月22日死去、26日全生庵にて葬祭〕／〔葬場詞、斎主磯部最信〕／発句（福田長之／東宮千別／麻生正守／小林泉／渡辺笠／渡辺長三郎）／和歌（加藤直鐵／塩谷弘宣／長坂某／東宮千別／小林泉／根本龍／杉村敬道）／悼詞（東宮鉄真呂／磯部最信／菟道春千代）

寄書　陳志（金津義次）／一小児世界を破る（天言子）／猪に就て感あり（戸塚弥三治）

寓言一話　鏡のはなし（鈴木長平）／見せもの師の話（蘇道）／公の字の話（同）／名を光らす話（間宮勘治郎）／灯心と油の話（永野常三）

問答　答 第六号の問に対して〔無念に如何して至る〕（田島丈吉／谷中春良）／神前に七五三を飾り始めし云々（山口格次郎）／問〔一つ心の定まれる本源〕（田島丈吉）／同〔無念無想の内に一句〕（鵜沢春月）

文苑（本荘まつ子／立石五栖／柳田／春俊／蘇道／正明／於ふね／星理／煙雨／野口教正／丹桃蹊／田島霞山／大賀保吉／本田岩太郎）

雑報　大成教会管長示達（磯部最信）／大成教所属教会信徒心得／大成教顧問員〔東宮千別、村越鐵善、福田長之〕／大成教庶務課長兼会計課長〔加藤直鐵〕／玉串料金百円／東宮越ケ谷分院通信／慈善家〔千束村小幡本院門中〕／横尾本院の近況〔遺訓集近日印刷〕／語格要覧〔東宮鉄真呂著述〕／井上正鐵翁在嶋記／雑誌代金未払の諸君へ

皇道青年会録事　蓋相称の語あり（田屋鶴）／道義的教育は今日の急務なり（伊藤喜太郎〔伊東？〕）／〔本荘会長の気節論は次号掲載／下谷車坂宮澤本院と千束村小幡本院の会場演説は次号掲載／本所麻生本院演説会〕／青年会々票／〔幹事熱心〕

第８号　1890年７月25日発行　32頁

会説　聊か感する事を記す

論説　復古原論（長三洲）／真理上より我神道を論す 緒論（磯部武者五郎）

随感随筆　七月三日官報附録 救恤金寄附（東京府）／教祖逸事の一／義心鉄石の如し

寓言一話　老人六歌仙の話／鉄道の話／十段目の話 改進新聞に／天に口ありの話（蘇道生）／我は支配人なりの話（同）

問答　答 第六号の問に対して 神前に七五三を飾り始めし時代及其理由（山口格次郎）

小説　湊町恋の出入（四方山人梅彦）

寄書　神拝式一定の事を聞て（直言子）／教法を利用して候補熱に及ぶなかれ（戸塚弥三治）／家屋（茅海散士）／

礼儀／禊教諸賢に質す（塩澤庄吉）
文苑（米寿／禾水／松泉／二禾／春良／雨竹／たのみ／花月／花守／龍堂／花鳥／すけ鐵／待月／柊六人／清夫／海上胤平／鶴／初見千景）
雑報　禊教東郷教院通信〔真岡町大字東郷字天王、小宅勇吉氏分院新築地に土地寄附〕／禊教南総鶴岡禊教院通信〔夷隅郡瑞澤村元大上川島要助氏宅にて入門修行、青年会開会〕／懺悔 〜 六根清浄／コレラ病の予防／貧民救助義捐金募集〔義捐金募集し東京府へ寄付〕／禊教各院の近況／〔三宅島在島記は八月初旬に出版／論説寓言等は第九号へ〕／雑誌嫌ひの○○／雑誌代金未払の諸君／義捐金追加
皇道青年会録事　岡惚を止めよ（村上丑六）／国民の義務（佐藤藤吉）／大和魂を鞏固にせよ（和田橘太郎）／〔河田町福田教院・谷中杉山教院・千束村根本教院にて青年会開会／車坂町小木教院青年会開会予定〕／南総台田禊教青年会より又々通信〔毎月五日開会〕／皇道青年会々員現在人員（田屋鶴）

第9号　未発見

第10号　1890年9月25日発行　32頁
会説　神道大学館設立事務所の懸札を読む（魯堂居士）
論説　修道真法略解〔故平山省斎〕／真理上ヨリ我神道ヲ論ズ 第一節（磯部武者五郎）
随感随筆　東宮殿下の御美徳／案山子賛／〔本荘宗武による祈願文〕
寄書　団結説（竹洲生）／横須賀按針の墓に至り有感（M.K.）／取次に止る勿れ（戸塚弥三治）／分離論者の岡目生へ回答〔随在天神雑誌百五十九号掲載「禊教会雑誌の仲裁論を読む」に対して〕（魯堂居士）
寓言一話　柿色の衣服の話（蘇道生）／底ぬけの話（同）／演劇の話（同）
小説　港町恋の出入 第二回
文苑（木村信三／大賀保吉／杉山兼吉／堀川春俊／寺井柳子／伊藤喜太郎／伊藤ます子／金杉泰介／加藤直鐵／寺井稲子／鵜沢恵雄／中川為靖／久野某／中根義朗／橋本元一郎／たの海／禾水／雨竹／鬼笑／いろは／可水／丸伝坊／南／霞昇／花友／間庫／菊我／片市／柳丸／松琴／気婆／春碩／一笑／蓼沼／とし女／松月／煙雨／鶯叟／花の本／蒼崖真逸／友仙子）
雑報　貧民救恤義捐金／素山彦弘道命〔百日祭〕／大成教々務庁大会議／親友会演説〔深谷で本荘宗武が神道大演説〕／応初学詩文之評正〔磯部武者五郎が出版予定〕／禊教講究会〔河田町〕／台田鶴岡教院の通信
皇道青年会録事　将来をトす（古荘正敬）／外人崇拝ハ其国ノ独権ヲ失ハシム（矢島庄五郎）／青年会開会〔本間教院・田島教院〕

第11号　1890年10月25日発行　32頁
会説　大成教所属の各教会教師諸君及び信徒諸君に望む〔禊教会雑誌改題して神道みそゝき主意9か条。教会300余ヶ所、教職5300余名とあり〕（加藤直鐵）
論説　修道真法略解 第二〔故平山省斎〕／神祇官ノ事（須々木生）／神社ハ信仰心ニ依テ維持ス（磯部武者五郎）
随感随筆　〔池上雪枝による故管長平山大人百日祭の祈願文〕／孝行は人倫の大道なり／日本の囚人〔ロシアで万国監獄会議開催中〕
寄書　狐話を聞て感あり（茅海散士）／速断の弊を論ず（戸塚弥三治）／禊教団結上の改良を望む（杉村敬道）／祓の活用如何（平野行則）
寓言一夕話　眼さきの話（梅園主人）／息の字と死の字の話（同）／肉眼に見えぬもの話（同）／浮世問答〔読売新聞〕（同）
小説　港町恋の出入 第三回
文苑（安蘇山人／寺井いね子／寺井柳子／堀川春俊／大賀保吉／鶴岡信僖／橋本元一郎／伊藤喜太郎／本多楽遊／伊藤ます子／中川百靖／金杉泰介／大塚昌吉／花守／一笑／永孝／孝／鬼笑／静山／雨竹／三要／稲賀／南／旭静／一其／白石／霞昇／多の海／景胤／静晴／禾水／朝寝／湖石／古今／三五／鳥暁／煙雨／鶯叟／花の本）
先哲雅集　自警詩（朱文公）／一の字の句／失題（西郷隆盛）／述懐（児玉利謙）／夜話道歌五首
雑報　上毛伊勢崎 禊教後藤教院〔通信委員村田岩太郎〕／禊教会宗義起草委員〔福田長之・小木藤太郎・麻生正守・本間鶴、加藤直鐵は辞退〕／谷中、井上神社祭例／札幌禊教社大祭の概況／井上正鐵翁在島記／大成教々務庁〔皇漢学など講義執行〕／同庁成第八十号達〔入社願書式〕／雑誌代価の儀に付／雑誌の改良
皇道青年会録事　神道を誤解する勿れ（村田岩太郎）／神の賞罰（和田橘太郎）／進むべし鞭つべし何そ奮起せざらんや（伊藤喜太郎）／禊教青年講究会〔伊勢崎町にて設立、毎月二回開会〕

注

1　大成教禊教について詳しくは、荻原稔『井上正鐵門中・禊教の成立と展開―慎食・調息・信心の教え―』（思想の科学社、2018年）第3章を参照されたい。

2　整理番号・出版物163。この所蔵については、菅田正昭「三宅島・女流人いねのこと―弘化・嘉永の島起こし―」（『しま』第33巻第4号、1988年）67頁の言及によって知ることを得た。菅田が触れるように田島弥平家文書は横浜開港資料館の調査を経て『横浜関係史料所在目録』に記載されているが、今回、同館による紙焼き複製は耐震工事の都合で閲覧できなかったため、田島弥平旧宅において原史料を参照した。なお、前回木村の所蔵分を用いた『みそゝき』第12号は、この田島弥平家文書にも含まれている（出版物164）。

3　三宅島へ遠島となっていた正鐵は、弘化2年に高橋亀次郎へ蚕種の送付を依頼し（『井上正鐵翁遺訓集』巻之六「御宮地」別御文）、翌年に村人が蚕の繁殖をはじめ、増産・産業化していく（浅沼元右衛門『三

宅島年代見聞記』三宅村神着・故浅沼健一郎氏所蔵)。高橋は、武蔵国幡羅郡西野村（現在の埼玉県熊谷市西野）の領主旗本前田家の「陣屋詰」の郷士であり、渋沢六左衛門や田部井伊惣治とともに「上州門中」として正鐵の書簡に登場する。この渋沢六左衛門や田部井伊惣治は利根川舟運の要所であった平塚河岸（現在の伊勢崎市平塚）の人物だった（荻原稔「野澤鐵教と『中臣祓略解』」、『神道及び神道史』別冊「禊教直門遺文一」、1988年)。高橋の居村は武蔵国だから上州ではないものの、姻戚関係等で上州平塚河岸に関連していたので「上州門中」と呼んだのだろう。前掲菅田正昭「三宅島・女流人いねのこと」66～67頁は、蚕種の移入を弘化４年としたうえで、当時の正鐵書簡に何人かの渋沢姓や「上ツ毛境町群平様」が出てくること、田島弥平家文書に『禊教会雑誌』が含まれていることから、「群平」が弥平の書き間違いである可能性と、島村蚕種との関連を指摘する。高橋が三宅島に送った白繭種（「白龍」）が島村蚕種だったことはほぼ間違いないが、「上ツ毛境町郡平様」宛の書簡（『井上正鐵翁遺訓集』巻之五「神明の光」。「群平」は菅田の誤写であろう）は弘化４年４月の発信で、蚕種の手配とは時期が異なるうえに、島村の隣村である境町村へ宛てている以上、「郡平」は弥平とは別人だと思われる。

4　正鐵が三宅島から村越正久に送った書簡に「正鐵事其御地へ蘇みがへり候と申す心にて蘇鉄を御送り申候」とある（麻生正一『神道家井上正鐵翁』神道中教院、1933年、110頁)。

5　『養蚕新論』乾（1872年）題画では、現在の場所に蘇鉄が生えておらず、庭先に置かれた小さな鉢植えの一つが蘇鉄にも見える。ただし、『続養蚕新論』巻二（1879年）４丁オでは、主屋の隣へ築かれた新蚕室（現在は解体）の脇にかなり大きな蘇鉄が描かれている（主屋のほうは不明)。

6　全生庵は、山岡鉄舟が開基となって1883年に開かれた臨済宗の寺。谷中墓地に程近い台東区谷中五丁目にある。

7　平山省斎の墓所は、谷中墓地の「安井ケ岡」と称された井上正鐵と父の安藤眞鐵の墓所（乙９号８側）に隣接して造営された。「安井ケ岡」は1879年６月に完成して祭典が執行されたが、その時点で平山省斎の墓所の設置が想定されていたかどうかは不明である。

8　この「祈願文」は代理人が奏上したものだが、池上雪枝自身は文中にも「このごろ病にて床にこもりぬればすべもすべなみ代理を参拝ましめて」とあって病中であり、翌1891年５月２日に死去した（『みそゝき』第18号)。

9　東宮鐵麻呂『東宮千別大人年譜』（同発行、1901年）24頁。

10　杉村敬道（1844～1904）は、東宮千別の門人。1890年当時、少教正で東宮本院の宇都宮分院長であった。1904年２月14日に61歳で没した。谷中霊園乙９号17側と宇都宮市塙田の禊神道教会境内に墓地がある。

11　1892年３月の各教会の番号化では、当初には第一教院から第十六教院までが指定された（『みそゝき』第29号)。

12　現在の高橋家は西野に居住していないが、墓地はあり、周囲の一般村民の墓域より一段高い別格になっている。亀次郎と思われる「徳翁壽昌居士」の墓（碑文が多く彫られているが摩耗して判読不能）を高橋吉従が建立し、吉従の妻である「可禰大刀自命」（1889年没）の墓を嗣子吉伴が建立していて、当時は神葬祭であったことがわかる（2013年10月、荻原調査)。この吉伴が『禊教会雑誌』の記事を書いたのである。

13　井上正鐵門中の行法については、前掲荻原稔『井上正鐵門中・禊教の成立と展開』第１章第１節に詳しい。また、弘化四年三月発信と推定される正鐵の書簡には「御祓唱へよふ、御門中にて人々心々に少々づゝ違ひ申候と存候。相成候はゞひとつよふ仕度事に候」（『井上正鐵翁遺訓集』巻之六「世界の霊」河内武胤宛）とあり、遠島後の早い頃から相違が発生していたことがわかる。

14　読売新聞社編『宗教大観』第４巻（同発行、1933年）51頁。

15　宮地正人『天皇制の政治史的研究』（校倉書房、1981年）159～163頁、佐々木聖使「明治二十三年神祇官設置運動と山田顕義」（『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』第18集、1987年)、山口輝臣『明治国家と宗教』（東京大学出版会、1999年）181～183、198頁、齊藤智朗「帝国憲法成立期にお

ける祭教分離論」（阪本是丸編『国家神道再考―祭政一致国家の形成と展開―』弘文堂、2006年）。

16　両雑誌の論争には、木村悠之介「出版に託された“一つの神道”という夢―会通社の社史が映す近代神道」（『近代出版研究』第２号、2023年）245～246頁でも触れた。

17　他に、加藤直鐵は「小石川区内或町」の「神道○○教本局」による「神道大学館設立事務所」が「寂寥」であることを挙げて「神道の二字を濫用」するものだと批判しているが（第10号）、当時の教派で大成教以外に小石川区へ本部を置いていたものはないため、この「神道○○教本局」の正体は分からない。

18　松岡翠稿「分離非分離に就き中島徳明の妄を弁ず」（『随在天神』第159号、1890年）。小室徳『神道復興史』（神祇官復興同志会、1943年）80頁で挙げられている非分離論もこの２件である。

19　大社教の千家尊福は、1899年の時点でも非分離論の立場を採っていた（佐藤範雄『信仰回顧六十五年』下巻、同刊行会、254頁）。前回言及した1886年発刊の『大社教雑誌』は、金光図書館では1887年の第９号（和装本）までしか所蔵されていないが、出雲大社教教務本庁所蔵の『大社教雑誌』『風調新誌』『風調』『幽顕』を史料として活用した岡本雅享『千家尊福と出雲信仰』（ちくま新書、2019年）298頁によれば、『大社教雑誌』は1892年の第70号まで刊行されつづけていた。前回『禊教新誌』を洋装本神道雑誌の先駆けとしたのに対し、『大社教雑誌』もどこかのタイミングで洋装本に切り替わっている可能性があるものの、筆者未見。他に前回触れることができなかった研究として、蓮門教会について武田道生「蓮門教の崩壊過程の研究―明治宗教史における蓮門教の位置」（『日本仏教』第59号、1983年）、同「日本近代における新宗教教団の展開過程―蓮門教の崩壊要因の分析を通して」（『大正大学大学院研究論集』第８号、1984年）、同「明治期の新宗教と法―蓮門教教団史から」（『宗教法』第10号、1991年）が、『霊験酬恩実報』『普照』『教海』『自観』といった諸雑誌に言及していた。さらに、2022年８月には黒住教学院が、同教機関誌『国の教』（1895～1908年）について、谷川穣らの作成による非常に詳細な記事目録を公開している（https://kurozumikyo.com/gakuin/kuninooshie.html）。

20　神保町のオタ「日記のすき間から掘り出す近代日本出版史」（『近代出版研究』創刊号、2022年）。先行研究として、宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』（みすず書房、1985年）や福井純子「京都滑稽家列伝」（西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999年）にも触れている。

21　「菟道春千代とは何者か（その１）」（http://shinyaoffice.seesaa.net/article/488114382.html）など。

22　「【東京】定例研究会報告 神習教直轄宮比教会における芸能」（https://minzokubunka.hatenablog.com/entry/2023/02/18/033903）に要旨が掲載されている（報告者名は記されていないが、竹見氏である旨、研究会よりご教示いただいた）。同会会報『大八洲』における論文化を期待したい。なお、この報告では『雅人』のうち第16巻までが参照されているが、宮比教会については、神保町のオタが所蔵する第18巻にも記事が出ているという（https://jyunku.hatenablog.com/entry/2023/03/28/185803）。

23　神道宮比会『宮比会乃手引』第１集（同発行、1930年、木村所蔵）。創立賛成者としては一戸兵衛・頭山満・田中光顕・大沼盾雄・阪谷芳郎が名を連ねていた。なお、事務所が置かれた四谷区花園町78では、同時期に「皇漢医」の久米嵒が「周天宇」道場を主宰している。食養と製薬を通じて協力関係にあったのかもしれない。

24　荻原稔「井上正鐵直門野澤鐵教の生涯―岸本昌熾『先師野澤鐵教先生眞傳記』の翻刻と紹介―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第53号、2016年）も参照されたい。